

鉄砲と大砲の戦い

慶長三年（一五九八）八月十八日、伏見城に秀吉が没した頃、第二次朝鮮侵攻（慶長の役・丁酉再乱）で、朝鮮南部海岸を占拠していた日本軍は、またしても李舜臣により制海権を奪われ、補給面で苦しめられ、戦線の縮小を余儀なくされていた。

第一次（文禄の役・壬辰倭乱）の場合とは異なり、講和後の権益として、朝鮮半島南部を実質支配する目的があり、各地に強固な日本式の城郭を築き守りにも力を注いでいた。それにもかかわらず、前年末には、築城成ったばかりの蔚山城が、明・朝鮮連合軍に不意をつかれ包囲され、さすがの加藤清正でさえ死を覚悟したほどの苦戦を味わっている。その時はぎりぎりの状況になってやると黒田長政や毛利秀元の援軍が到着して明・朝鮮連合等は崩れ去った。しかし戦局は日増しに日本側に不利になっていった。

そこに秀吉の死の知らせである。釜山近くにいた、機



新井 宏

を見るに敏な武将たちは、秀吉没後の政局のため、いち早く帰国したが、西側地区の順天城や泗川城で明・朝鮮連合軍に対峙していた小西行長や島津義弘たちは敵しかった。海上封鎖で、日本への道は閉ざされていた。

しかし、日本側は陸戦では強かった。十月一日泗川城に立てこもった島津勢は一万たらずの軍勢にもかかわらず、十倍以上の明・朝鮮連合軍を迎え撃ち、わずかな犠牲を払っただけで記録的な大勝利を得る。三方を海に囲まれた丘陵に築いた日本式城郭・泗川城（船津里城）は、敵を引き寄せては鉄砲で狙い撃つ戦法に実に効果的で、その後の朝鮮の築城史を一変させたほどの影響を与えた。近くには、明・朝鮮連合軍の四万人の犠牲者を葬った大きな塚がある。

一方、順天城を守る小西行長ら一万三千も十月二日に陸海から激しく攻撃を受けるが、十月八日になると主力の明陸軍が戦意を喪失して撤退してしまふ。

この勝利で日本は明・朝鮮連合軍との間に和議を結ぶ。陸戦の勝利のお陰で、何とか日本へ安全に帰国できる目途がついた。

しかしおさまらなかつたのは李舜臣である。順天城の海上封鎖をかえって強化して、小西行長らの日本への撤退を許さない。

この頃、泗川城で大勝した島津義弘は既に帰国のため与善島に集結していたが、そこに小西行長らが順天城に閉じ込められているとの知らせが入る。このままでは補給のない日本勢は全滅するしかない。島津義弘は諸将と協議し、全軍あげて順天の救援に向う。

そしてついに慶長三年十一月十八日兩軍は露梁海峡で激突した。島津側は五百隻の船の大半を失うほどの犠牲を出したが、李舜臣も銃弾を受け亡くなる。その間に小西行長らはいよいよやく脱出に成功する。諸将我先に逃げ去る中で島津義弘の義挙であった。

韓国の英雄はなんと言っても李舜臣である。文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)の時、侵略してきた日本軍と十度戦って全戦全勝している。日本軍が水上で戦って勝ったのは、第二次侵攻(慶長の役)が始まった直後の巨済島の海戦だけで、それは李舜臣が同僚から大功を妬まれ讒言により白衣従軍(一兵卒として従軍すること)に貶められていた最中のことであった。その後、三道水軍統

制使に復した李舜臣は残存のわずか十二隻の亀甲船を率いて、珍島付近で百三十三隻の日本水軍に攻め込んで三十一隻を大破し大勝利している。

それにしても、この圧倒的な強さはどこからきたものであろうか。単に戦争上手というには理解しがたい強さなのである。

もっとも、日本という国は、海上国でありながら、海軍が強かったのは日清・日露戦争の時だけである。百済救援の時にも白村江では全滅しているし、元寇の時も水軍で守る発想がまるで無かった。だからこの頃の日本船の多くは「武装兵士を乗せたジャンク」に過ぎなかつたと酷評されてもしかたがない。その上鉄砲の生産には熱中しながら、大砲には極めて冷淡であった。

それに対して韓国は、高麗時代に蒙古に七次にわたって攻められながらも、首都を江華島に移して、三十年近くも抵抗を続けた歴史をもっている。これは高麗が制海権を維持していたからにはかならず、高麗が蒙古に屈してからでさえ、三別抄が抵抗運動を三年間も続けられたのも水軍の力による。第一、その頃日本には独立した水軍など無かつたが、李朝では陸海独立の軍制がしかれ、李舜臣は全羅左水使から三道水軍統制使に登っている。思うに、倭寇に悩まされながら、水軍の強化を続けていた結果であろうか、火器の開発にも熱心であった。その頃、日本から多量の銅を輸入したのも砲の生産のためで

あった。

さて、李舜臣が戦った亀甲船とはどのようなものであろうか。記録によると船長三十四メートル、極めて強固な構造材を用い、体当たり攻撃ができるようになってい上、甲板を厚板と鉄甲で覆い、接舷されても敵兵が乗り込めないように無数の刀錐が立てられていた。復元船を作るのに、七億円ほどかかったと言われているが、亀甲船の特徴はそればかりでなかった。船首、船尾に各二門、左右両舷に各六門から十門の大砲が搭載されていたのである。砲架をつけた内部配置構造は、その頃のヨーロッパ船と極めて良く似ている。

大砲としては主として十五世紀初に制定された中型砲の地字銃筒や玄字銃筒が用いられた。玄字銃筒は口径が六センチで射程距離は二千歩（二千四百メートル）と記録にある。しかし実戦では有効射程は四百メートル位だったであろう。それにしても、制定当初の十五世紀初の水準としては、欧州でも通用するほど立派なものであった。十五世紀初といえ、そのころ日本では大砲はもとより鉄砲も知らない。いや知っていたかもしれないが使うとはしていなかった。だから、文禄の役（壬辰倭乱）の頃になっても、日本側の火器としては、実質的には百匁玉（〇・四キロ）の大筒が最高で、地字銃筒の五キロ砲丸はもとより、玄字銃筒の一キロ砲丸にも及ばなかった。水軍の劣勢に驚いて、急遽、秀吉が作って送ったの

も大筒二百丁であった。

文禄・慶長の役は、武器の面で言えば、水陸ともに鉄砲と大砲の戦いであった。当時としては世界的にみても優秀な鉄砲を多数持った日本軍は野戦ではめっぽう強かったが、一方の明や朝鮮側には多数の大砲や火箭があった。そこには当然戦争の仕方に違いがある。その差がより鮮明に現れたのが寡少兵力で圧勝した碧蹄館や泗川城などの陸上戦であり、同じく寡少兵力で大活躍した李舜臣の亀甲船の海上戦であった。

とにかく、海上では亀甲船のように、兵員の露出するところがない構造に対して、鉄砲は全く無力であった。接舷して切り込むにしても刀錐が邪魔をして自由にならず、逆に近接距離から発射される大砲斉射は実に効果的であった。おそらく日本としても多少の戦闘用船は持っていたであろうが、その多くは船員輸送用のものに過ぎなかった。その頃、日本軍は海上補給を断たれる恐れなど予想もしていなかったのではなからうか。

戦争という行為には、その国民性が実に良く現れる。この頃、日本には大砲と船の思想が欠如していた。

ヨーロッパが東洋を制したのは何と云っても大砲と船である。C・M・チボラの『大砲と帆船』を読むと、それらの進化がヨーロッパの歴史、しいては世界の歴史にいかにも大きな影響を与えたか実に良くわかる。

新大陸発見にわくポルトガルやスペインに、大量の大

砲を送りこむヨーロッパ、そして新大陸からもたらされる膨大な富が再びオランダを経てヨーロッパに還流される様子、そこに銅資源に恵まれぬイギリスが鑄鉄砲を開発して参入し、スペインそしてオランダと覇権を奪う様子などを知ると、長ったらしく書かれた西欧史ではなかなか理解しえなかったことが、いっぺんに理解できる。

そもそも砲とは、大型の投石器のことであった。巨大な縄に蓄えた振り弾性を利用して、投擲用の腕木を反射的に動かす原理で、中国の七梢砲では二百五十人で操作したというから、数百キロくらい石なら百メートル以上飛ばせたであろう。このような戦争機械は西洋にもあったが、日本では全く聞かない。古来日本には砲の思想がなかった。

厳密な意味での大砲の出現は、中国・ヨーロッパともほぼ同時期で、十四世紀のはじめとされているが、いずれが先かについては見解が分かれている。しかし火薬の軍事使用となると中国が圧倒的に早く、十世紀には一種の爆裂弾として使われはじめ、元寇の時にも「鉄砲」と称して用いられている。また大砲の実物が残っている点でも、中国には至順三年（一三三二）銘の銅銃（口径八センチ）があるのに、ヨーロッパでは一三九九年のタンネンベルグ城の攻略につかわれた銃筒があるだけで、全体としては中国に一日の長があるようである。

ところが、その後の大砲の進化に関しては、ヨーロッ

パが圧倒的に早い。一四二〇年代に鑄造されたロードス銅砲は全長三メートルを越え口径が三十センチもある。

また一四五〇年に作られ、現在はエンジンバラ城にあるモンス・メグ砲は鑄鉄製で、重さ七トン、口径四十八センチであり、重さ百五十キロの石弾を三キロも飛ばせたという。その砲身部の製法は、四十八センチの丸太の周りに鑄鉄二十五枚の角板を円筒状に並べ、これを外側から三十七個の鍛造製リングで焼き嵌める方法によっている。樽を作る要領に似ていることから、バレル式鍛鉄砲と言われている。

そして大型化の窮極は、オスマントルコが一四五三年のコンスタンティノープルの攻略に用いたメフメット二世砲で、同型のものが英国ウールウィッチ博物館にある。ハンガリー人の技師ウルパンの設計によるといわれ、長さ五メートル、重さ十九トン、口径六十四センチの鑄銅砲で、五百キロの石弾を二キロ飛ばせたという。戦艦大和の主砲口径でさえ四十四センチであったことと比較して見てほしい。

何時の時代でもそうであるが、ひとつの技術や様式が生まれると、人類はその効率を考えることなく、必ずいったん巨大化に向かう傾向がある。ピラミットや巨大墳墓がその最たるものであるが大砲もそれに劣らない

しかし、このような巨砲は機動性がなく、装填するにも時間がかかり、狙いも不正確で心理的な効果しか上げ

得ず、その後の大砲進化の主流とはなり得なかった。大型化が主流となり結局遅れをとったのが、トルコやインドなど回教国であり、ヨーロッパでは野戦や海戦でも使える機動性のある大砲開発に向う。

ところで、大砲の製法には、上述した青銅鑄砲や鍛鉄砲の他に鑄鉄砲があった。もちろん、鑄鉄砲はコストが安く、青銅鑄砲の替りとして誰もが技術開発を目指したものであるが、何しろその脆さが問題であった。強度を高めるために、重量を増やしては、操作性が保てず、結局は青銅鑄砲の進化が先行する結果となっていた。

そこに登場したのがイギリスの鑄鉄砲である。イギリスとしては銅資源に恵まれず、何としても鑄鉄砲を開発したかった。ヘンリー七世のお声懸りで始められた鑄鉄砲の製作はなかなか成果を上げなかったが、ついにサセックスにおいて鑄鉄砲の製造に成功する。これがスペインの無敵艦隊を破る大きな要因となった。

一方、中国の大砲も十五世紀のはじめまでは、ヨーロッパに全く遜色なかったと考えられている。元を倒して建国した明は、火器に対する関心が極めて高く、洪武八年（一三七五）製の口径二十三センチ、砲重七十四キロの銅製砲二門や洪武十年（一三七七）製の口径二十一センチ、長一メートルの鑄鉄砲などが出土している。また銃としては、永楽元年（一四〇三）から製作された一・五センチ口径の天字銃筒が、正統元年（一四三六）までに

約十万丁製作されたという。大変な分量である。しかし、その後の平和の到来で、中国では火器の技術的な進歩は停滞を招く。

ところが朝鮮半島では大砲の製造がむしろ盛んになる。かって蒙古に攻められ、また元寇に動員された時に火器の威力を知ってからは、主として倭寇を対象にした矢箭による火攻用に力を入れていたが、十五世紀に入り李朝になると、明の技術を盗んで改良し各種の砲を作り始める。その結果として制定されたのが李舜臣らが用いた地字銃筒や玄字銃筒などである。これら制式砲は四種類あったが、その中で最大の天字銃筒は青銅製で重量が約千二百斤（八百キロ）で、口径十二センチ、重量十三斤（八キロ）の鑄鉄鉛衣丸を千二百歩（千五百メートル）飛ばせた。ヨーロッパの水準から見ても立派な大砲である。

さて、この頃いったい日本はどうしていたのであろうか。

十五世紀の中頃には、日本は中国や朝鮮半島に対して大量の銅や硫黄を輸出している。明や李朝ではこれを大砲や火薬の原料としていた。いくら明や李朝が火砲のことを秘密にしても、これが洩れないはずがない。ましてこれらの武器は倭寇対策にも用いられていた。日本人がこれを知らなかったとはとても思えないのである。

しかし、日本では大砲のことが全く話題になっていな

い。下剋上・群雄割拠の時代がはじまった十六世紀の初めになっても、影も形もないのである。これは全くどうしたことであろうか。武器の歴史から見ると極めて異常なのである。

日本での史料上の大砲初見は、永禄三年(一五六〇)豊後の大友宗麟が將軍足利義輝へ「石火矢ならびに種子島筒」を贈ったとの記録である。種子島への鉄砲伝来から遅れること十七年である。しかしこの時の石火矢は小型のものであった。

大友宗麟はその頃しばしばポルトガルに大砲を求めているが、船の難破などによって実際に入手できたのは天正四年(一五七六)になってからで、それも二門だけであった。その内の一門が口径九・五センチで全長三メートル弱の青銅製仏郎機(通称石火矢)で、靖国神社遊就館に現存している。「国崩」の異名があり、一貫目大玉以上を撃てる性能があったが、当時のヨーロッパの水準で言えば、まだ小型砲である。これをモデルにして、大友氏は天正六年(一五七八)には大砲數門を鑄造しているし、天正八、十年には織田氏に大砲を贈っている。

ちょうどこの頃(天正八年)織田信長は「テツハウライサス」ため「ナラ中」で梵鐘を徵発している。また天正十三年(一五八五)に小西行長が雑賀攻めに用いた大砲も「信長がシナ人に命じて伊勢の国で鑄造させた」ものであり、北条氏も天正十七年(一五八九)に領内の鑄

物師に大筒二十丁の鑄造を命じているなど、日本でも鑄造砲が製作され始めたのは間違いない。おそらく青銅砲であったであろう。新規なものに興味を示す信長のもとで、いよいよ日本にも大砲の時代が將來されつつあった。

しかし日本にはもうひとつの独自の技術系列があった。鉄砲である。これは種子島に鉄砲が伝来してからわずか三十有余年後には、世界最大規模の鉄砲戦・長篠の戦いが行われるほどに急発展していた。その技術をもとにして発達したのが国友鍛冶による大筒すなわち鉄砲の大型化の流れである。信長は元亀二年(一五七二)国友に命じて二百匁玉用九尺大筒砲二丁を岐阜に納めてさせている。ただしこれは大砲というにはあまりに小型でやはり鉄砲の範疇のものであった。

秀吉ももちろん大砲には注目していた。特に文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)のために、名護屋城に梵鐘を集めて砲を鑄造させたり、徳川家康ら諸大名に「大鉄砲」の供出を命じたり、播磨の鑄物師に「唐人之御用大鉄砲」や「石火矢」の鑄造を命じたりしている。

しかし、その程度の努力では、大砲に関しては、まだ朝鮮や中国のレベルましてはヨーロッパのレベルとは大差があった。これが文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)で李舜臣に徹底的にやられる原因となった。

その後、日本では慶長五年(一六〇〇)に関が原の戦いが起こるが、大砲はほとんど使われていない。やはり

野戦は鉄砲にかぎった。

むしろ、日本において大砲が注目されたのは、大阪冬の陣の時である。難攻不落の大阪城には、朝鮮での鹵獲砲などを含め、かなりの大砲が備蓄されていた。徳川家康は大砲を求めて動き出す。

まず、大筒をさらに大型化したものとして、国友鍛冶に対して、慶長九年（一六〇四）に八百匁玉用、慶長十四年（一六一七）に一貫目玉用を発注している。また、堺の鉄砲鍛冶芝辻に対しても、慶長十四年に一貫三百匁玉用、慶長十六年に一貫五百匁玉用が各一門発注される。

この内最大の一貫五百匁玉砲が、有名な「家康の大砲」すなわち靖国神社遊就館の芝辻砲である。口径九・五センチ、長さ三・一三メートル・重量一・七トンで、五キロの鉛砲丸を発射できる。均衡のとれた美しい大砲で、ここに至り国産の大砲が、はじめて大友宗麟が輸入したポルトガル砲の青銅仏郎機の規模を越える。

この「家康の大砲」は形状から見て当初铸铁砲と思われるが、調査の結果、約十三ミリの鉄板を同心円状に八枚重ね合わせて鍛接したものと分った。技術的には、鉄砲製造方法の延長線上にあり、極めて高価なものだったことは疑いない。筆者の推定によると一門千両程度で当時のヨーロッパの同口径青銅砲の十倍、铸铁砲の二十倍はしたと思われる。これでは汎用武器には到底なりえなかったが、一方その性能も抜群であった。おそらく同

口径砲としては、当時のヨーロッパの大砲をはるかに抜き去る射程と命中精度を有していたに違いない。淀君を脅かすための大型狙撃砲としての役割を担っていたのはあるまいか。

それにしても、これだけ高価ではどうにもならない。家康は結局オランダから慶長十九年（一六一四）に四貫目玉（十五キロ）あるいは五貫目玉（二十キロ）を撃てる大砲十二門、イギリスから真鍮鑄製のカルバリン十七ポンド（八キロ）砲（口径十三センチ）四門を輸入している。

このように遅ればせながら盛んになった大砲も、大阪冬の陣を終えると全く省みられなくなる。よほど日本人は大砲を好まなかったようである。その原因は何だったのであろうか。

いままで挙げられている理由を列挙すると次のようになっている。

- 一、日本の都市には、ヨーロッパのような城壁がなく、城郭も土塁と水濠で防御されていたため、当時の実体弾では威力がなかったため。
- 二、日本人の戦争観に基づくもので、個を前面に出した手柄しか称賛されず、技術よりも技能が重用される風土であったため。
- 三、当時の日本は、道路が整備されておらず、日本馬の体格も貧弱で、牽引車両が全くなく、大砲の機動

性がなかったため。

いずれも納得し得る説明であるが、もうひとつそこには、大砲の持つ経済効率の問題があった。すなわち、当時としては極度に発達した火縄銃に比べると、鍛鉄砲はもとより、青銅砲さえも、戦争経済効率性に見て、対抗しえなかったのではないか。それほど鉄砲は効率的な武器であった。

その当時、火縄銃の射程や命中精度が世界水準を大きく上回っていたことは良く知られている。だから文録・慶長の役(千辰・丁酉倭乱)の後、李朝が取り入れた日本式の火縄銃隊が、十七世紀中頃になってからでさえ、清がロシアと軍事衝突を起こした時に派遣を要請され、ロシア軍を敗走させる活躍をしている。その頃になっても、日本で発展を遂げた小銃はヨーロッパ銃に対抗しうる水準を示していたのである。

さて、このように歴史的に大砲や船を軽視していた日本が、幕末、明治維新で大変革をとげる。よほど四隻の黒船に脅威を感じたのであろう。夢中になって欧米を追いかけはじめる。そして早くも明治九年(一八七六)には、軍艦雲揚丸で江華島に迫り、李朝を開国させ、さらには日清・日露戦争に勝ち大艦巨砲主義に走り出したのである。

しかし大艦巨砲主義は日本の気風には結局似合わなかつた。

た。戦国時代の日本が大砲には見向きもせず、鉄砲に走つたように、機動力のある航空戦力を生かす方が日本のやり方だったのかも知れない。そして戦況が悪化しており帰りした時、それが神風特攻隊の悲劇になってしまったのではなからうか。

韓国では李舜臣は忠武公と諡名されている。一五四五年生まれで亡くなった時は五十三才。韓国南部の李舜臣海戦ゆかりの地には忠武公を祭る忠烈祠がいくつもある。艦型があったには違いないが、亀甲船を考案したのも李舜臣。職業軍人として彼は実に良く日本を研究していた。戦いに臨んで命をかけるものは必ず生き、命を求めるとは必ず死す。

韓国では誰でも知っている李舜臣の言葉である。戦場で助かる方法はただひとつ危険に飛び込むことだと日頃言っていた。そういえば、島津義弘も関が原で西軍総崩れの中、家康の本陣の前を突破して、「前に向かって退く」という捨て身の戦法で、薩摩に帰還した。やはり戦いの帰趨は武器ではなく、将の器量によるところが多かったのかも知れない。鉄砲と大砲にちょっとこだわり過ぎたかも知れない。